

講演

お茶の水女子大学ECCCELL 第三回保育フォーラムから

高橋清賀子氏・大戸美也子氏

「幼稚園草創期の保育者に学ぶ」

— 初代保姆 豊田英雄の挑戦(1) —

構成／安治陽子
(大学教員)

「幼稚園の日」特別フォーラム

一八七六(明治九)年十一月十六日、わが国最初の官立幼稚園である東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園が開設された。

ちょうど一三七年後(二〇一三年)の同日(「幼稚園の日」)に開催されたお茶の水女子大学の教育研究プロジェクトECCCELL^{*}主催の保育フォーラムでは、最初の幼稚園で日本人初の保姆^{ほま}となった豊田英雄^{ゆふ}(一八四五—一九四一)を取り上げ、まず、ひ孫にあたる高橋清賀子氏(保育史研究家)に、その九十七年にわたる生涯についてお話しいただいた。次いで、大戸美也子

氏(武蔵野大学名誉教授)に、幼稚園草創期における英雄ら保育者の挑戦と、それを現在において将来の保育へとつなげる視点について論じていただいた。その内容を二回にわたって報告する。

^{*}文部科学省特別経費「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業。リーダー：浜口順子教授。

高橋清賀子氏講演「豊田英雄の生涯」

1 英雄の家系

豊田英雄は、一八四五(弘化二)年生まれ、父は水戸藩士桑原幾太郎、母は水戸学の統帥であり西郷隆盛も崇拜した藤田東湖の妹雪子

であった。水戸藩代々藩主の命により二五十年にわたって編纂された『大日本史』の編纂にかかわる学者の家系であり、後に結婚して義父となった豊田天功もまた、かの吉田松陰が教えを請うたほどの学者として名高く、『大日本史』の編纂所であった彰考館（現徳川ミュージアム）の総裁でもあった。

2 誕生から幼稚園保姆時代

幕末動乱期に少女時代を過ごし、父は蟄居幽閉の身、付き合いは親戚筋に限るといふ状況であったが、母や叔母と共に書や和歌を楽しみ、学問的には非常に恵まれた環境であった。十二歳の時、弟政が誕生したが、その四か月後に母が急逝、四つ年上の姉立子と二人で弟を育てることになる。英雄はこの時いわば保育実習を経験したことになり、それが後に最初の幼稚園保姆を命じられても動じず任を果したことにつながっているのだろう。

その後十七歳で父を亡くし、十八歳で豊田

小太郎と結婚したが、藩の蘭学修得特待生に選出されるほどの秀才であった夫は、学問を通してヨーロッパを知り脱藩、英雄に「心を鬼にしておれよ」という言葉を残して、京都へ立った。そして、「攘夷攘夷と言つて目を閉じていてはいけない、世界は動いているのだ」と説いた帰り道、堀川のほとりで水戸藩の過激な浪士二人に暗殺された。二十三歳の英雄は、藩命で甥を養子に迎え、豊田家の家督を継ぐことになったのである。

気丈にも英雄は、母や叔母、父や義父から学んだことをもう一度学び直して、近隣の子女に教えようと決意し、夫小太郎が遺した小刀を懐に携えて毎晩勉強に通った。自分を高めることによって、「心を鬼にしておれよ」と言つて京都に立った夫の思いを必ず実現しようと考えたのだろう。二十六歳の時、自宅で開塾、三年後に開校した茨城県立発桜女学校の教壇に立ったが、一八七五（明治八）年、三十一歳の時、東京女子師範学校発足と同時

四等訓導

豊田 芙雄

幼稚園保母專

務可相心得事

但一月金貳圓増給
俸事

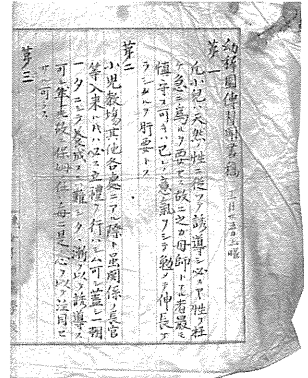
明治九年十月二日

東京女子師範学校

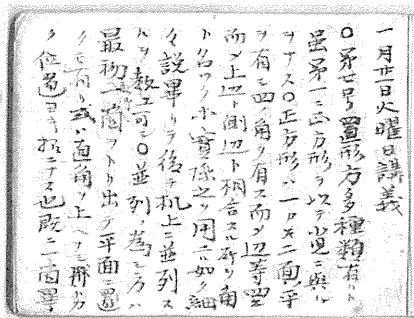
▲画像1 幼稚園保母辞令

に読書教員として抜てきされ上京した。翌年、東京女子師範学校の附属幼稚園が設立されると、第一号の保母に任命され、

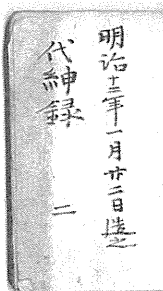
草創期の幼稚園教育の理論と実践の基礎づくりに携わることとなったのである(画像1)。そして一八七六(明治九)年十一月には、幼稚園開園を目前にした研修において、ドイツ人松野クララからフレーベルの理論を教わることになる。附属幼稚園監事であった関信三らが英語から日本語への通訳を行い、芙雄はその内容を「幼稚園伝習聞書稿」(画像2)、「代神録」(画像3)などに書き残している。何度も書き直した詳細な記録であり、複数の稿が残されている。



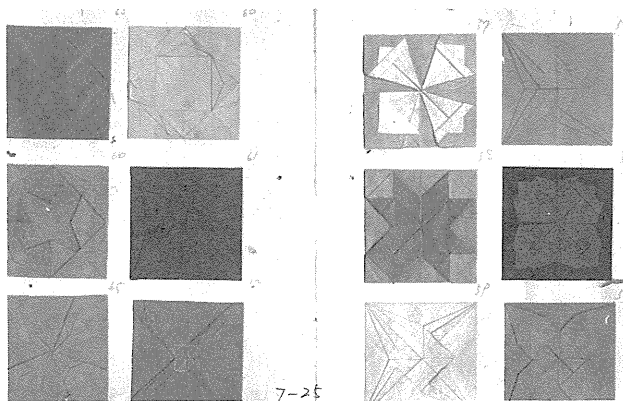
▲画像2 幼稚園伝習聞書稿 (明治9年11月25日)



▲画像3 代神録



フレーベルの恩物についても伝習を受けたが、同じ物が無ければ自分たちで調達して工夫してやっていく、無い物は作る、が信念だったそうである。例えば、今でいう折り紙は、茨城県の和紙を取り寄せ、色を染めて色紙を作ったものである（画像4）。



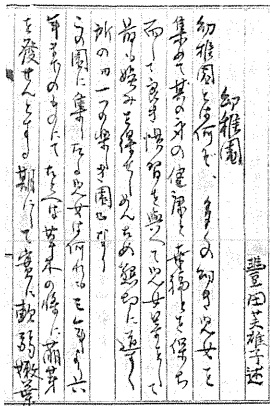
▲画像4 第十八恩物摺紙法

そのようにして二年余り、思いがけない辞令が下りる。鹿兒島へ行って、二番目の幼稚園をつくってほしいというのである。英雄は兄を西南の役で亡くしており、鹿兒島行きを一度は断っている。しかし、東京女子師範学校摂理であった中村正直からの手紙には「あなたが行かないで誰が行くのです、頑張つてらっしゃい」とあり、それに心動かされたのか、三十五歳の時、鹿兒島に向けて旅立った。鹿兒島出張は、当初三か月の予定であったが最終的に一年三か月に及んだ。帰京に際し、英雄は日誌という形で教員らに言葉を残した。「一、庭園に樹木を促すこと」「二、全州図ただし日本図にてもなきにはまされり」と。

十年ほど前、鹿兒島大学附属幼稚園で、探していた全州図、古い地球儀が出てきたと言われた。そして園庭では、現在まで樹木草木が守られている。園長室に飾られた写真は英雄のものであり、英雄の言い残したことが、ずっと幼稚園で大事にされていたのである。

東京に戻った美雄は、東京女子師範学校附属幼稚園保母に復帰し、大阪の愛珠幼稚園など後発の幼稚園を支援した。

教育者として美雄が本当にしたかったことは、育幼の責に任ずる者を育てることであった。そのために行くとはいわぬうちに保母ら上京した。そして一年もしないうちに保母専務となり、幼稚園を立ち上げる。松野クラから学んだこと、そしてその後の実践から、保育について、幼稚園とは何かについて考えた。美雄が書き残した『保育の葉』には、「幼稚園とは何ぞ、多くの幼き児女を集めて其の



▲画像5 幼稚園とは何ぞ
(『保育の葉』から)

身の健康と幸福とを保ち而して良き慣習を与えて児女等をして最も嬉しみを得せしめんとめ懇切に導く所の『一つの楽しき園』なり」とある(画像5)。美雄が考えたことは、今も変わらない保育の大切なことである。

その後、四十三歳の時、水戸徳川侯爵夫妻に同行して欧州へ行き、女子教育、幼児教育について欧州教育事情を視察した。イタリアでもパリでも、非常に楽しかったという。当時の写真を見ると、悲しいことの多かった少女時代から、初めて柔らかな幸せそうな顔になれたのではないかと感じる。

3 女子教育時代から晩年

欧州での経験から持ち帰ったものは、寄宿制の女学校「翠芳学舎」の設立につながった。一八九四(明治二七)年、五十歳になった美雄は現在の東京有楽町、数寄屋橋の辺りに二階建ての女学校を建て、フランス語も教えるなど、最先端の女子教育を行っていた。しか

し一年で閉校にし、宇都宮に赴く。ドイツ公使であった西園寺公望が帰国し、宇都宮の高等女学校を立て直してもらいたい、とのたつての願いがあつたからである。生徒が七名になつていた女学校を、七年間で三百五十人の女学校に立て直した。そして五十七歳の時、惜しまれながら水戸へ帰り、茨城県女子師範学校と茨城県立水戸高等女学校に赴任した。七十八歳まで勤めた女学校（現 茨城県立水戸第二高等学校）には、今でも正門前に英雄の像がある。七十三歳からは大成女学校に呼ばれて教員になり、七十九歳から八十三歳までは校長として勤め、その後、九十一歳まで現役の教員として勤めた。九十歳を過ぎてもしゃんとして、身だしなみ、姿勢、なすこともきちつとしていたと伝え聞いている。

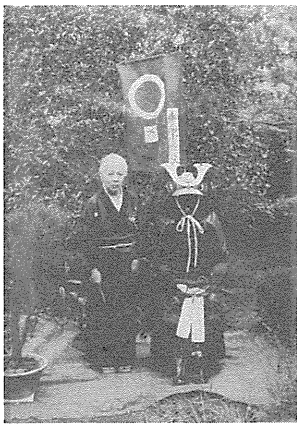
晩年は、非常に穏やかな時間を過ごした。そして、大きな出合いが三つあつた。

一つは、夫との再会である。夫の鎧などが掘り起こされ、京都から水戸へ戻ってきたの

である。やっと会えた、再会でできた、と喜んだという（画像6）。

二つ目は来日したヘレン・ケラーを水戸駅に出迎えたことである。英雄は、欧州の女子教育事情を視察した際、しっかりした女子がたくさんいる、日本もこうあるべき、これを望むと報告書に書いている。

三つ目は、ひ孫との生活である。私が生まれたのは英雄の最晩年で、一緒に過ごしたのは三年間ほど。実際の記憶はないのだが、写真を見ると、楽しんでくれたんだな、プレゼントができたんだな、と思う。一九四一（昭和十六）年、九十七年の生涯を閉じた。



▲画像6 夫との再会

4 命をかけて守った史料

豊田天功、小太郎、英雄の物品、史料は四千点以上ある。そのうち英雄の物、千四百七十二点の中から三百点に絞って、昨年「大洗町幕末と明治の博物館」で展示をしていた。いた（企画展「日本人初の幼稚園保姆 豊田英雄」幼児・女子教育に捧げた九十七年の生涯（平成二四年十月二十日～十二月十一日）。

戦前、倉橋惣三先生が家にいらして、英雄が生きている今なら幼稚園史が書ける、最初の時の物が全部ある、と言ってくくださった。英雄が一生懸命整理をしていた物を、いらっしやれば差し上げ、お貸ししていたのだが、しかし戦争や地震があり、それらがすべて焼けてしまった。このことに、当時三十代だった父（健彦、英雄の養子伴の次男）は大変傷付いた。そして、倉橋先生に申し訳なかったと思うのだが、「もう手放せない。あんなに英雄が大事にしていた物は、もう自分の魂で守るしかない。みんながそうやって守ってくれ

ても守りきれないのだから、やはり身内が守るしかないんだ」という固い気持ちが見えなかった。戦後、倉橋先生と学生の方がお見えになったのだが、申し訳ありません、お引き取りください、これは、身内の魂で守るしかないのです、と申し上げたのであった。

戦時中、父は林野庁に勤務していたが、松戸に十四メートルほどの防空壕を掘り、そこに桐の箆たすを置き、文書や鎧などを保管した。戦後は東京木場に製材所を開き、大きな水害に何度も見舞われた。重い机も浮くほどだった時は、そこに畳を三枚乗せ、その上に箆筒を乗せてしのいだ。雨にぬれた文書は私たち子どもが乾かして、再び大切に収めた。隣が火事になった時には、父が火の粉を浴びながら般若心経を夢中で唱えて守ったのを覚えている。

父が亡くなった後、弟が三人いるが、私が受け継いで保管し、今日このようにお話をさせていただいた。―続く―

*文中の年齢はすべて数え年です。